

『成功の鍵』

四方田直樹

登場人物

富士宮いずみ (17)	高校二年生	長女		いずみ	
富士宮カブオ (19)	専門学校生	長男		カブオ	
富士宮みかげ (47)	母			みかげ	
横手タカシ (17)	高校二年生	隣の子。	幼なじみ		タカシ

9月。夏の終わりの頃。
相模原市郊外。

富士宮家の二階、カブオの部屋。

カブオが毛布にくるまり寝そべりながらスマートフォンをみている。
カブオ、寝間着（上下そろいのスウェット）
ヘッドホンで聞いているので音は聞こえない。

無表情のカブオ、しばらくして毛布の中でもぞもぞとズボンを脱ぎ始める。
カブオ、完全にズボンを脱ぎきる。

いずみが扉をノックして入ってくる。

(SFX) ノック、扉が開く音。

いずみ、開襟シャツに学校指定のスカート（長め）。ソバージュヘア。

いずみ 「お兄ちゃん、マリオカートのハンドル貸して」

カブオ、いずみに気がついていない。

いずみ、兄の方は見ず、ゲーム機関係のものがあるあたりを探す。

カブオ、視線をスマホ画面から離さずティッシュを探す。
思っていたところがない、闇雲に手で探す。

視線をあげて辺りを見、ティッシュではなくいずみに気がつく。

カブオ、毛布にくるまったまま地面を転がり、いずみと距離をおく。

カブオ 「いつから居た!?!」

いずみ、カブオを見る。

いずみ 「なに見てんの? SPEC（スペック）?」

カブオ 「ああ、そうスペック」

いずみ 「あれ、あの、あの人、出てる」

カブオ 「戸田恵梨香?」

いずみ 「坊主、ボウズの」

カブオ 「えっと」

いずみ 「あった」

いずみ、マリオカートのハンドルを発見。

いずみ 「じゃ借りてぐね」

カブオ 「どっかいくの?」

いずみ 「うん」

カブオ 「これから?」

いずみ 「うん」

カブオ 「晩飯は?」

いずみ 「食べるよ」

カブオ 「ウチで?」

いずみ 「うん」

カブオ 「お母さんなんて?」

いずみ 「なに?大丈夫だよ。隣行っただけだから。今日おじさんとおばさん出かけてターちゃん一人なんだってゲームやり放題だぜ」

カブオ 「タカシ一人?」

いずみ 「うん」

カブオ 「ゲームしようぜって?」

いずみ 「うん!」

カブオ 「タカシ一人?」

いずみ 「うん」

カブオ 「おじさんとおばさんは出かけてる?」

いずみ 「言ったじゃん。そっだよ!」

いずみ、 ハンドルを動かしてゲームをしているジェスチャー。

カブオ 「まづくね?」

いずみ 「なにが?」

カブオ 「いや、だめだと思っな」

いずみ 「もう高校生だよ」(笑) 夜遅くまでゲームしてもいいじゃん?」

カブオ 「いやそうじゃなくて」

いずみ 「お母さんにチクる気?ゲーム。サイテー」

カブオ 「言うかよ。ゲームじゃねえよ。ゲームじゃなくてよ」

いずみ 「じゃあなに?」

カブオ 「あれだよ、ほら、な」

いずみ 「はつきり言っよ」

カブオ 「あー……うー。ほら、さあ」

いずみ 「ぜんぜんはつきりじゃない。わかんない」

カブオ 「わかれよ」

いずみ 「わかんないよ」

カブオ 「そっだよな。お前は、そういうやつだよな……んー」

カブオ、 考えてのち。

カブオ 「ん、よし。わかった」

カブオ、やはり言い出せない。

カブオ 「いいづれー」

いずみ 「なにさ」

いずみ、カブオの毛布を引っ張る。

カブオ 「はなせ」

いずみ、離さない。

カブオ 「はなれろー！」

いずみ、毛布を離す。

カブオ 「いいか、聞け。あぶないんだ。今日隣に行くのは」

いずみ 「なんで？」

カブオ 「なんでっておじさんもおばさんもないからだよ」

いずみ、笑い出す。

いずみ 「アハハハハ……お兄ちゃん大丈夫だよ」

カブオ 「いや、な」

いずみ 「お隣、アルソック入ってるじゃん。ウチより安全だよ。防犯カメラだってあるじゃん」

カブオ 「外じゃねえよ。危険は家の中にあるんだよ！」

いずみ 「え？じゃ何？」

カブオ 「それはよう、そのよう……」

いずみ 「ちょっと前までおばあちゃんいたから結構手すりとかあるよ？ターちゃんち？」

カブオ 「そういうことじゃねえんだって」

いずみ 「なにがあぶないっていうの？おばけでもでるって言うのかよう」

カブオ 「んー」

いずみ、自分で「おばけ」と口にだしたことでなんだか少しこわくなる。

いずみ 「(ひとりの言のように) お化けなんていないさ。心霊写真みんなうそ。うん」

カブオ 「ん？」

いずみ 「なんでもない(口笛)ピュー(を吹こうとしてやめる)今のは口笛じゃないよ。へび呼んでないよ」

カブオ 「なんだよ」

いずみ 「なんでもないってー！」

みかげがやってくる。

みかげが開いている扉をノックして入ってくる。

(SE) ノック。

みかげ 「カブオ、あんたバイトだっけ？今日？食べるの？」

毛布にくるまったカブオの姿を見て、目を見開いて凝視。

部屋にいずみがいることに気がつき、さらにカブオを凝視。

カブオ 「食べる食べる、えっと、いずみがコントローラー探しに来たの」

みかげ 「コントローラー？」

カブオ 「ゲームの。動かすやつーなんか隣に行くんだってよ？」

いずみ 「おしゃべり！」

みかげ 「(いずみに) あんた隣に行くの？」

いずみ 「いいでしょ？ねえ」

みかげ 「ご飯時に迷惑でしょ？」

いずみ 「食べてから行くから。ね、いいでしょ？」

みかげ 「あ、そう。ならいいけど」

カブオ 「あの」

いずみ、カブオを睨む。

カブオ 「いや」

いずみ 「なんでもない。なんでもない」

みかげ 「あ、そう」

みかげ、携帯電話を取り出し、タカシの母に電話しようとする。

みかげ 「ちょっと横手さんに挨拶しとくから」

いずみ 「いいよそうなの！」

みかげ 「よくないの。タカシくんの勉強のじやまするんだから」

いずみ 「いいの大丈夫なの」

みかげ 「何？あんた……あ」

みかげ、携帯電話を耳元から離す。

みかげ 「お伊勢さん。横手さん。夫婦でお伊勢参りとミキモト真珠島(しんじゅしま)に行くって。二泊三日で」

みかげ、いずみを見る。

みかげ 「お隣、タカシ君しかいないの?」

いずみ 「あーうん」

みかげ 「いずみ」

みかげ、いずみの両肩をつかみじっと目を見る。

みかげ 「いつから?いつからそんなことする子になっちゃったの!？」

いずみ 「え?明日休みなんだし夜遅くまでゲームしても……いいでしょ?」

みかげ 「ゲーム?」

みかげ、カブオを見て

みかげ 「ゲームって、それは若者言葉でなにかの隠喩?」

カブオ 「隠喩?」

みかげ 「何かの例え!？」

カブオ 「え?ちがう、こいつはただタカシとゲームしたいだけ」

みかげ 「タカシ君とゲーム?」

カブオ 「マリオカートとかスマッシュブラザーズだよ」

いずみ 「メタルギアソリッドもやるよ!ファイブ!」

カブオ 「プレステ4もあるんだっけ?」

いずみ 「そう!テレビもこんなでっかいの」

いずみ、テレビの大きさを示すジェスチャー。

みかげ、再びいずみの肩をつかみ、目を見る。

みかげ 「そうだよね。アンタはそういう子だよね」

いずみ 「なにが?」

みかげ 「んー。タカシ君もゲームしたいだけ……か」

みかげ、思考を巡らせる。

みかげ 「いや、万が一もありえる……の?の?どうなの?信用していいの?なんか私が考え過ぎなの?」

いずみ 「お母さん変」

みかげ、いずみを見て。

いずみ 「?」

みかげ 「まずはご飯にしましょう。タカシ君も招待してうちで食べましょう。どうせコン

ビニか何かですますつもりなんでしょ?」

いずみ 「そしたら、泊まりにいつてもいいの?」

みかげ 「タカシ君もゲームがしたいって。ゲームが目的だっていうならいいよ」

いずみ 「やったー。言うにきまってんじゃん」

みかげ 「タカシ君に電話して。ご飯食べにきませんか? って…いや、私は知らないことにして」

いずみ 「なんで?」

みかげ 「いずみが思いついて、晩ご飯に呼ぶことにした。いい?」

いずみ 「えー?」

みかげ 「だったらお隣に行くのはなし!」

いずみ 「えー。もー。電話借りるね」

いずみ、カブオのスマートフォンを手取る。

カブオ 「わー!バカバカ!」

カブオ、スマートフォンをいずみから奪う。

カブオ、スマートフォンのインターネットアプリを閉じて、タカシに電話をかけてからいずみに渡す。

カブオ 「ホラよ」

いずみ 「(電話) あ、ターちゃん?うん。まだうち。あのさ、ウチにご飯食べにこない?まだ食べてないでしょ?ええ?」

いずみ、みかげを見る。

いずみ 「ううん。私がそう思っただけ?え?お母さんは知らない。泊まりに行くのも。うん」

みかげ 「すぐこれる?ご飯食べてすぐゲームしたいから」

いずみ 「すぐこれる?ご飯食べてすぐゲームしたいから。うん。じゃ、まってる」

いずみ、電話を切る。

みかげ、深く息をはく。

みかげ 「ふー……」

いずみ 「すぐ来るって」

(SE) 玄関チャイム「ピンポン」。

一階、玄関からタカシの声がする。

タカシ 「(声) こんばんわーとなりのタカシですけどー!」
カブオ 「早!もう来た」
みかげ 「どうしよ、あ」

みかげ、扉を開け、廊下に出て扉の裏に身を隠す。

みかげ 「私はいません。いいね?」
いずみ 「え?」

みかげ 「呼んで」

いずみ 「(玄関に向かって) お兄ちゃんの部屋へあがっていいよー!」

カブオ 「ここ?ほかでやってよ」

勢い良く、階段をあがりタカシがやってくる。

カブオ、その間にスポンをはこうと手を伸ばすものごとかない。

タカシ、扉の近くで、息を整えて部屋に入ってくる。

タカシ 「やっ」

いずみ 「早いじゃん」

タカシ 「え?いや?そう?うん。かも。うん(笑顔)」

タカシといずみ、向き合っていたがタカシ、いずみの視線に照れてしまい視線を外す。カブオの姿が目に入る。

タカシ 「カブさん。ナニやってんの?」

カブオ 「え?」

タカシ 「え?」

カブオ 「飯食いに来たんなら二人とも台所行ってくれない?」

いずみ、扉の後ろにいるだろう母を見る。

いずみ 「(カブオに) どうすんの?」

カブオ 「なに?」

いずみ 「台所に行ったってお母さんいないじゃん」

いずみ、扉の方をちらちらと見る。

タカシ 「どうしたの?」

いずみ 「えーと」

カブオ 「ウチの母さんまだ準備できてないんじゃないかな?なあ」

いずみ 「それ、それぞれ」

タカシ 「あ、そうなんだ?……」

タカシ、 はずみをさわるかさわらないかな感じでそっと部屋の隅に誘導する。 はずみにだけ伝わる声量で

タカシ 「それじゃウチで食べる?ピザとろうかと思ってたんだ」

はずみ 「ピザー!?え?ピザーラ?」

タカシ 「うん。宅配の。一人じゃ食べきれないからさ。一緒に食べようよ。飲み物も買ったあるんだ。炭酸大丈夫だよね」

はずみ 「スプライト?」

タカシ 「コーラじゃだめ?」

はずみ 「コーラは飲めないよ」

タカシ 「じゃ、ピザと一緒に注文しようスプライト」

はずみ 「いいの!?!ピザピザ、ピザとスプライト」

はずみ、 タカシの手を取り小躍り。

タカシ、 一人興奮気味。

はずみ、 カブオと目が合う。

はずみ 「(タカシに) どうしよう。すごいピザ食べたそうだよあの入」

カブオ 「そんなでもねえよ?」

タカシ 「カブさんは今日アルバイトだよね?」

カブオ 「ああ?うん。え?詳しいね」

タカシ 「何切れかとおいてあげる?」

はずみ 「え?あーうん(できればお腹いっぱい食べてしまいたい)でも余らないかもなくピザはおいしいからな」

カブオ 「だからそこまで食べたいわけじゃないって」

みかげ、 扉の裏からそっと出てくる。

みかげ 「あら、タカシ君来てたの?」

タカシ、 内心驚き、動揺しそうになるが瞬時に取り繕う。

タカシ 「おばさんこんばんは、おじゃましています」

みかげ 「いらっしやい」

はずみ 「ターちゃんピザとるんだって今日。食べきれないから一緒に食べよって。ターちゃんちでご飯でもいいでしょ?」

みかげ 「え?悪いわよ?ねえ」

タカシ 「いや、いいんですよ?ほんと。余っても、もったいから」

はずみ 「ほらー」

みかげ 「お父さん、お母さんが旅行に行ってるよね。確か？あ、だから出前？」

タカシ 「あ、はい」

みかげ 「いずみ、ピザは私がとってあげるからウチで食べたら？」

いずみ 「うそ？いいの？誕生日でもないのに？」

みかげ 「タカシ君も一緒にね？」

タカシ 「あ、でも」

いずみ 「そのあとでターちゃんちにゲームしに行ってもいいでしょ？」

タカシ、いずみを見る。

カブオはタイミングを見計らってズボンを履きたいがなかなかタイミン
グがつかめない。

みかげ 「いいけど……もしかしてお泊まり？」

いずみ 「うん！」

タカシ 「あの」

みかげ 「タカシ君迷惑じゃないの？」

タカシ 「僕は全然」

みかげ 「タカシ君」

みかげ、タカシをまっすぐ見据える。

タカシ 「ハイ」

みかげ 「お父さんはタカシ君のこといつも素直で良い子だっておもってる。信じてる」

タカシ 「ありがとうございます」

みかげ 「いずみがお泊まりに行くものいいかかって思ってる。昔はよく泊まりにいったし、

タカシ君が来たこともあったもんね？」

いずみ 「そうでしょ？だからいいでしょ？」

みかげ 「(タカシに) 本当にゲームがしたいだけよね？」

みかげ、タカシをじっと見る。

タカシ、顔を背ける。

みかげ 「タカシ君」

タカシ 「いや、あのその……」

タカシ、汗が止まらない。ズボンのポケットからハンカチを取り出す。

その際、同じポケットに入れていた自販機で買ったコンドームの箱が転げ
落ちる。

いずみが拾おうとするもタカシが大慌てで先に拾いポケットに押し込む。

みかげ 「タカシ君ー?」

タカシ 「ちがうんです。おばさん聞いてください。無理矢理とか。欲求をみたしたいとか。興味本位とかではないんです!」

みかげが箱をしまったタカシのポケットを指差す。

タカシ 「もしかして万が一、そういうことになるかもと想像して自販機で購入してしまっただけです!」

いずみ 「なんなのそれ?」

みかげとカブオ、いずみを見、再びタカシを見る。

タカシ 「万が一を考えてるからおばさんも心配されているんでしょ?」

みかげ 「え?」

タカシ 「僕の一方的な思いだけで無理矢理とかそう言うことはいたしません。でも、もしいずみと合意にいたったときは(ポケットをさわりながら)そんなことがもしかしてあるかもしれないと用意しただけです。おばさん。おばさんは言ってくださいましたよね?僕のことを信じてるって。ウソじゃないですよね」

みかげ 「ずるい言い方ね。タカシ君」

タカシ 「言いますか?おばさんがそれを」

いずみ 「ねえ何の話!?!」

みかげ 「それじゃ、タカシ君はこの子のこと好いてるって言うの?」

タカシ、たじろぐも観念して。

タカシ 「僕はいずみが……大好きです!」

カブオ 「おお」

いずみ 「私もターちゃんすきー」

タカシ 「いずみ」

みかげ、いずみを見て

みかげ 「あなたの好きとタカシ君の好きはちがうの!」

タカシ 「おばさん!?!」

いずみ 「なにが?」

みかげ 「タカシ君の好きはね、いずみが良いついたらチューしたいとかおっぱいさわらせてほしいって言う好きなの」

いずみ 「!?!」

いずみ、赤面しつつ自分の口やら胸やらを手で押さえながら後ずさりしてしやがみ込む。

タカシ 「おばさんそれは極論です！いきなりそんなことしない！」

いずみがタカシを見る。

みかげ 「したくない訳じゃないんでしょ？」

いずみがみかげを見る。今後しばらく二人のうち発言した方を見る感じで。

タカシ 「あたりまえじゃないですか！健康な男子高校生ですよ！」

みかげ 「ほら」

タカシ 「それはゆくゆくはって話ですって」

みかげ 「ゆくゆくはそういうこともしたいってことですよ」

タカシ 「……いけませんか？」

みかげ 「ダメでしょそんなことは」

タカシ 「そういうおばさんはどうなんですか？」

みかげ 「え？」

タカシ 「そう言うことをなさったこと、一度もないんですか？」

タカシ、カブオとみずきを見て。

タカシ 「無いはず、ないですよね？」

みかげ 「……くっ」

みかげ、タカシから顔を背ける。

カブオ 「そう言う話は聞きたくないんだけど」

いずみ 「お母さんがキスー！」

カブオ 「お前もよー」

みかげ、いずみに駆け寄り。

みかげ 「こんな子なのよ？好きなマンガはなに？」

いずみ 「え？……でんじゃらすじーさん」

みかげ 「コロコロコミックを愛読しているような子なの。タカシ君がどこでどんな知識を仕入れてるか知らないけど、恋のリードなんてしてくれないんだから」

タカシ 「そんなことわかってます！（本当はわかってないと思う）」

タカシ、いずみの前に座る。

いずみ、後ずさり。

タカシが手を差し伸べ、いずみ、不意につかむ。

タカシ 「いずみ」

いずみ 「へ、へー！」

タカシ 「おれずっといずみが好きだ。だからおれとつきあってくれ！」

みかげ 「タカシ君」

いずみ 「つきあうって……あの、手をつないで学校行ったり、休みの日に一緒に出かけたりする？」

タカシ 「うん」

いずみ 「キスしたりする？」

タカシ 「いずみがいいっていうなら」

いずみ 「アタシが？言っつ？え？ええ？」

タカシ 「どう……かな？」

いずみ 「わかんないよ。ちやおもなかよしも買ってもらえなかったから。わかんない……
ごめんなさい」

タカシ、いずみの手を離す。

タカシ 「……今日はウチにくるの無しでいい？」

いずみ、うなずく。

タカシ、みかげを見て。泣きそうな顔で。

タカシ 「どうも大変失礼いたしました！」

タカシ、出て行くこうとする。

みかげ 「待って……あ、止めちゃった」

タカシが足を止める。

みかげ 「いずみ、いいの？」

いずみ 「え？」

みかげ 「言っつことない？タカシ君に？」

いずみ 「え？」

いずみ、タカシを見て。

いずみ 「えーと……急にいろいろ言われてもわかんないから！でも、その。まっつてよ考
えるから。考えてどうにかなんのかわかんないけど。今日は無理！無理無理！無
理！まっつてくれる？」

タカシ、後ろ姿のまままでこくりと頷く。

みかげ 「ごめんね……ごはんね。ご飯支度しなきゃ。タカシ君も食べてって」

タカシ 「でも」

みかげ 「遠慮なんかしたことなかったでしょ？」

タカシ 「はい。すみません。ありがとうございます」

みかげ、部屋を出て行く。

立ち尽くすタカシの背中をいずみが押す。

いずみ 「いこう?」

タカシ 「うん」

二人、部屋を出て行く。

カブオ、三人が完全に部屋を出て行ったのを見計らって、立ち上がり、ズボンを拾い上げて履く。

カブオ 「お母さん……ごめんで言う相手は俺じゃないの?」

カブオ再び、横になりスマートフォンを見る。

カブオ 「もう、バイトに行く時間だよ!」

終わり